

明治大学大学院経営学研究科 (経営労務プログラム) 募集のご案内

平成20年度より、明治大学大学院経営学研究科に経営労務プログラムが開設され、連合会より、同プログラムに社会保険労務士を推薦することとしております。

同プログラムへの推薦により、これまでに107名の社労士が明治大学大学院に入学し、修了した方にはMBA(経営学修士)が授与されています。

つきましては、令和3年度入試におきましても、下記のとおり募集要項が定められましたので、ご案内いたします。

本年度は、新型コロナウイルスの影響により、今後日程等が変更となる可能性があります。その際は、会員の皆様に『月刊社労士』及び連合会ホームページの会員専用ページ等においてご案内いたします。

募集要項 (要約)

1. 明治大学大学院経営学研究科 (博士前期課程) 概要

- (1) 大学院所在地
東京都千代田区神田駿河台1-1
 - ・ JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩3分
 - ・ 東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩5分
 - ・ 都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩5分
- (2) 授業時間帯
平日夜間 (月曜日～金曜日)・土曜日
- (3) 修了要件
 - ① 2年以上の在学及び36単位以上の修得
 - ② 修士論文 (又は課題研究レポート) の提出
- (4) 学費等 (初年度)

入 学 金	200,000円
授 業 料	560,000円
教育充実料	60,000円
そ の 他	3,000円
合 計	823,000円
- (5) その他
 - ① 明治大学大学院の募集要項は、明治大学大学院HPからダウンロードしてください。
https://www.meiji.ac.jp/dai_in/bosyuyoko-kakomon/6t5h7p00001c3a52-att/2021keieiken-yoko.pdf
 - ② 入学検定料 35,000円

2. 応募要件

以下の3つの要件すべてを満たす場合、応募することができます。

- (1) 社会保険労務士として登録して3年を経過していること。
- (2) 3年以上の実務経験(※1)を有する者、またはそれと同等以上の経験(※2)を有する者であること。

(※1)「実務経験」とは、次のいずれかをいう。

 - ① 開業社会保険労務士または社会保険労務士法人の社員として、顧問先事業所における人事労務管理の実務を行っているか、または行っていたことがあること。

- ② 社会保険労務士事務所または社会保険労務士法人の勤務社会保険労務士として顧問先事業所における人事労務管理の実務を担当しているか、または担当したことがあること。
 - ③ 勤務社会保険労務士として、勤務先企業の人事労務管理の実務を担当しているか、または担当したことがあること。
- (※2)「それと同等以上の経験」とは、所属の都道府県社会保険労務士会会長に自己の業務内容等を記載した職務経歴書を提出し、(※1)と同等以上と認められた場合をいう。
- (3) 明治大学大学院に入学する時点で、22歳以上であること。

3. 募集期間

令和2年7月21日(火)から令和2年9月16日(水)

4. 提出書類

(1) 職務経歴書

- ① 所定の様式を使用してください。
- ② 所定の様式は、連合会ホームページの会員専用ページ お知らせ「明治大学大学院経営学研究科(経営労務プログラム) 募集及び入試説明会開催のご案内」よりダウンロードできます。
なお、A4版でプリントアウトし、提出してください。

(2) 課題レポート

テーマ 下記1および2のいずれかから1つを選択してください。

1. 新型コロナウイルス感染拡大の影響で、在宅勤務が広がるなか、テレワーク等が企業の労務管理に与える影響について、社会保険労務士の視点で、あなたの考えを述べてください。
2. 新型コロナウイルス感染拡大の影響で、労働者の解雇や有期労働契約者の雇止めが拡大しているなか、雇用を守るための企業の取り組みについて、社会保険労務士の視点で、あなたの考えを述べてください。

- ①文字数 : 3,000字程度 (2,700字~3,300字)

※句読点は文字数にカウントしてください。

※参考文献は必ず明記してください。なお、文末に参考文献を列記する場合、文字数のカウント外としてください(文末に文字数を明記してください)。

- ②提出形式 : パソコンで作成し、A4版・縦方向、横書でプリントアウトし、提出してください。

- ③その他 : レポートは、1行目に所属会及び氏名、2行目に選択したテーマ、その後1行あけて、4行目から本文を書き始めてください。

5. 書類提出先

所属の都道府県社会保険労務士会

6. 提出方法

- (1) 所属の都道府県社会保険労務士会に持参
各都道府県社会保険労務士会の業務時間内に持参してください。
- (2) 所属の都道府県社会保険労務士会に郵送
特定記録郵便もしくは簡易書留扱いで郵送してください。
令和2年9月16日(水)必着です。

※提出書類に不備があった場合は受け付けられません。

7. 連合会における推薦者の決定

- (1) 都道府県社会保険労務士会会長の推薦に基づき、連合会に設置された推薦委員会において、提出された課題レポートを審査のうえ決定されます。
- (2) 推薦に関する結果は、連合会から直接応募者に通知します。
- (3) 推薦者の決定に関する照会には応じられませんので、あらかじめご了承ください。

8. 出願

- (1) 連合会において推薦が決定した場合、別途、明治大学大学院に出願していただくこととなります。
- (2) 明治大学大学院への出願期間は、令和2年11月30日(月)～令和2年12月4日(金)となります。

9. 明治大学大学院における合格者の決定

- (1) 出願者の書類選考・面接試問が明治大学大学院において行われます。
- (2) 面接試問日は令和3年2月20日(土)、合格者の決定日は令和3年2月23日(火)です。詳細は明治大学大学院経営学研究科の募集要項をご確認ください。
- (3) 合格に関する通知は、明治大学大学院から直接合格者に行われます。

お問い合わせ先 全国社会保険労務士会連合会 社会保険労務士総合研究機構 TEL 03-6225-4864

よくある質問 (FAQ)



Q 仕事が忙しいため、2年間で卒業単位を取得した上で、修士論文、課題レポートを書き上げる自信がありません。必ず2年間で修了しなければいけないのでしょうか。



A 必ずしも2年間で修了する必要はありません。最大で4年間在籍可能です。過去のケースでは、入学当初から3年計画で入学された方もいらっしゃいました。ご自身の状況に応じて柔軟な学び方が可能です。

また、大学院入学前に「科目等履修生制度」を利用して、入学後の負担を減らす方もいらっしゃいます。当該制度については下記をご確認ください。

<科目等履修生制度について>

大学院で開設されている特定の科目を履修し、一定の単位を修得することが可能です(学士の学位を有する方のみ)。また、本制度で修得した単位は、大学院入学後に「単位認定申請」することにより、大学院修了に必要な単位として認定されます。



Q 大学を卒業してからかなりの年数が経過しているため、講義についていけるのか不安です。大学院の授業を体感できる方法などはありますか。



A 上記「科目等履修生制度」の他、例年9月下旬～10月上旬に開催される公開講座に参加することにより、大学院入学前に授業の雰囲気等を体感し、不安を払拭した上でチャレンジされる方もいらっしゃいます。詳細につきましては、明治大学大学院経営学研究科までお問合せください。



Q 大学在学時、卒論を書いた経験がない方、卒論を書いてから年数が経過している方、あるいは、卒論を書いた経験はあるが経営学とは遠い分野である方をサポートしていただける制度はありますか。



A 本プログラムでは、研究活動をサポートするための**教育補助講師**（次頁参照）が置かれ、自学・自習のための支援や論文執筆に関わる助言を行います。不安を払拭しながら研究に臨める体制が整えられています。

社労士院生の研究活動に対するサポート体制

—教育補助講師による研究支援体制—

【入試説明会における明治大学大学院経営学研究科資料より抜粋】

経営学研究科に入学した現役社労士は、2年間の研究活動を通じて修士論文または課題研究レポートをまとめて提出しなければなりません。実務志向の考え方を学術研究志向に転換させるのは、誰でも大変に辛いことです。経営労務プログラムは、修士論文を作成する過程において現役社労士が直面する困難を想定し社労士の研究活動をサポートするための教育補助講師体制を整えています。

1. 授業補助
2. 教材作成
3. 授業のフォローアップ

担当教員の指示に従って、授業のフォローアップを行います。このフォローアップとは、やむをえない事情で授業を欠席した院生に対し、教材を配布したり、授業の概要と要点について解説したり、また、必要な場合には、必読すべき文献を紹介します。

4. 学習への支援・指導

担当教員の指示に従って、院生個人の自学・自習に対する支援と指導を行います。この場合の“支援”とは、書誌の利用法、文献検索法、図書館活用法、研究に必要な文献収集、情報収集に関わるものを指しています。また、この場合の“指導”とは、修士論文執筆に必要な「執筆要領」に関わる助言、場合によっては、修士論文作成上の注意などを指しています。

〈 科目等履修生制度・教育補助講師等に関する問い合わせ先 〉

明治大学大学院経営学研究科

東京都千代田区神田駿河台1-1 TEL: 03-3296-4705

不測の事態と 学びの継続

中西 晶

(明治大学大学院経営学研究科 教授)



この原稿を書いている2020年7月現在、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の影響は広範囲にわたり、いまだ収束する気配は見られません。こうした不測の事態に対し、政府や自治体でさまざまな対策が行われるなか、社労士のみなさんも東奔西走されているのではないのでしょうか？大学院でも卒業式、入学式の中止、オンライン授業の積極的導入など、不測の事態への対応に追われました。（今でも追われています。）

このような状況のなか、強く思い出されたのが2011年3月11日の東日本大震災とそれに伴う大津波、そして東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故です。ちょうど年度がわりの時期、在校生と新入生の安否確認から新年度が始まったのを記憶しています。当研究室の経営労務プログラムの新入生のうち、お二人が被災地在住でした。なかなかすぐには連絡がとれず非常に心配でしたが、幸いにも無事が確認されました。当時はまだオンライン授業の環境も十分に整っていませんでしたが、メーリングリストなどで交流を図りました。キャンパス自体は大きな被害もなく5月から教室での授業をはじめることができました。被災地から東京に通学することは大きな負担だったと思いますが、お二人とも学びを継続し、修士論文を書き上げ、無事に修了することができました。

そして2020年、コロナ禍の混乱のなかで新年度が始まりました。今年度になってから院生と直接に交流したことはまだありません。春学期、毎週の授業とゼミは、Zoomを通じてリアルタイムで行っています。院生は、自宅や職場などそれぞれの場所からオンラインでアクセスし、講義を聴き、ディスカッションします。最初は少し不安でしたが、皆さん問題なく接続して参加しています。

当研究室では、以前より出張が入ってしまった方に対してYoutube（制限付き）で欠席時の授業記録を送ったり、遠隔地の院生とSkypeでつないだりし

て、学びをつづけるサポートを行ってきました。そのため、大学全体としてのオンライン授業の導入は、むしろ当然の流れでした。

少しだけ、他大学院の話をしてします。私は、熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻の非常勤講師もやっています（今年度は特別研究につき休講）。この研究科では、社会人を対象に2005年の開設時よりオンライン授業（eラーニング）を中心に講義を設計しています。私は東京にある熊本大学のサテライトオフィスで、そこに集まってきた院生と熊本の院生、場合によっては自宅等からアクセスしている院生をつないで講義を行いました。一部はサテライトオフィスに集合しているので、対面と遠隔を交えた「ブレンディッド・ラーニング」です。

今後、COVID-19の状況次第ですが、この記事を読んでいるみなさんが入学するときには、オンライン授業やブレンディッド・ラーニングを当然のものとする時代となっていくでしょう。それは、極端にいうと「いつでも」「どこでも」学べる時代になるということでもあります。忙しい社会人にとって時間と場所の制約が緩むことは、むしろ学びを継続するチャンスではないのでしょうか？

不測の事態のなか、このチャンスを生かし、学びを継続し、研究成果をあげる自信と覚悟のある方は、ぜひ明治大学経営学研究科経営労務プログラムに応募してください。

Profile 京都大学文学部哲学科（心理学専攻）卒業後、ジャスコ株式会社（現・イオン株式会社）入社。同社在職中に筑波大学大学院経営・政策科学研究科修士課程修了。その後、学校法人産能大学（現・学校法人産業能率大学）に転職し、人事・人材開発に関する調査研究、コンサルティングに従事。同大学在職中に東京工業大学大学院社会理工学研究科博士後期課程修了、博士（学術）。東京都立科学技術大学助教授、明治大学経営学部助教授を経て2007年より現職。主な担当科目は、経営心理学、心理学、ナレッジ・マネジメント論。主要著書に「安全・安心革新戦略」（学文社、共編著）「マネジメントの心理学」（日科技連出版社）「風狂が企業を変える！」（芙蓉書房、共著）「マネジメント基礎力」（NTT出版、共著）、「高信頼性組織の条件」（生産性出版）「想定外のマネジメント【第3版】：高信頼性組織とは何か」（文真堂、監訳）「サービス経営学入門」（同友館、共編著）など

大学院へ進学を 希望されるみなさんへ



山崎 憲

(明治大学大学院経営学研究科 准教授)

大学院の進学を目指されるみなさんと同じような境遇に、今から20年ほど前の私はいました。雇われて仕事をしている傍らで、再び学ぶことができないかという考えがある日突然、頭に浮かんだのです。みなさんの何かの役に立てばと、その時の話をご紹介したいと思います。

仕事を続けながら、夜や土日に通学ができるところを探そうとすると選択肢は二つくらいしかありませんでした。そのうちの一つは出願時期が過ぎていました。けれども、思い立ったが吉日ということで、残りの一つ応募したのでした。どんな試験があったのか記憶はありませんが、社会人として学びたいという強い意欲を持っているかどうか評価されたような気がします。その意味では社労士のみなさんが参加するコースと同じようなものだったと思います。

運よく合格することができたものの、ほんとうに大変なのはそれからでした。上司や人事の承諾や同僚の後押しを得ることが欠かせません。それでも就業時間が終わってすぐに帰ることがない職場で気を使いながら帰り支度をしなければなりません。それからあわてて電車に飛び乗り、日曜日を除いてほぼ毎日、大学院に通っていたことを思い出します。

必要な文献を読んだり、レポートを書くことは体力勝負でした。みなさんと同じように日中は仕事をしているし、夜は10時近くまで講義に参加していたので、その後の時間しか使えなかったからです。朝方の3時くらいに寝て、9時に出勤する日が続きました。それでもまだこうしたことはなんとか耐えました。大学を卒業してしばらくして進学したせいなのか、新しく知ることがすべて新鮮に感じられたからです。

それでもどうにも困ることがありました。修士論文を書くことです。何をどうすれば良いのか具体的

にわからないのです。漠然とした不安を感じながら時間だけが過ぎていきました。その状況を変えたのは指導教授との会話からでした。焦点が絞りが切れていない論文のアイデアを聞きながら、一冊の本を読むようにと紹介してくれたのです。勧められるままに読んでみると、目から鱗が落ちるような気がしました。

その本にはほかに読むべき参考文献のヒントがたくさん隠されていました。指導教授は、「こうした方が良いよ」といった話はまったくしませんでした。私が自分で気が付くまで待っていたのです。その分だけ産みの苦しみがあつたかもしれません。

その経験から得られたことは、自分が取り組む研究は、先人の積み重ねてきた成果を使って組み立てることがほとんどだったということでした。そのうえにほんのわずかながら自分の考えたことが乗っかります。だから参考文献を探したり、たくさん読むという作業がとても重要になります。修士論文の最後の一行を書き上げたときの、一つのことをやり遂げたという気持ちは今でも忘れることができません。

これから研究という道を進もうとされるみなさんにとって、かつて私が指導を受けたように少しでもお手伝いできればと考えています。

Profile 2010年から2017年まで中央大学法学部兼任講師。1967年生まれ。博士(経営学)。2003年から2006年に外務省専門調査員として在デトロイト日本国総領事館に赴任。著書に『働くことを問い直す』(岩波書店、2014年)、『デトロイトウェイの破綻一日米自動車産業の明暗』(旬報社、2010年)、『フレキシブル人事の失敗—日本とアメリカの経験』(黒田兼一との共著、旬報社、2012年)、『仕事と暮らしを取りもどす—社会正義のアメリカ』(遠藤公嗣、筒井美紀との共著、岩波書店、2012年) ほか。